

# 消防職員を対象とした研修における災害エスノグラフィの適用事例

## A Case Study Utilizing Disaster Ethnography for Emergency Responder Training

太田 和良<sup>1</sup>  
Kazuyoshi OTA<sup>1</sup>

<sup>1</sup>和歌山県県土整備部河川課  
River Division, Wakayama Prefecture

This paper demonstrated the use of disaster ethnographies as a tool to help inexperienced emergency responders to re-experience step-by-step processes associated with real-life flood disaster responses. 48 fire department fresh recruits were assigned to read and analyze disaster ethnographies of 3 local volunteer firefighters who responded to the 2004 Typhoon 23 flooding disasters. A following brainstorming session facilitated them in formalizing effective flooding disaster responses when working together with local volunteer firefighters. Post-session questionnaire survey supported that the brainstorming session helped the learners to re-create images of actual flooding situations and to understand corresponding effective response/preparedness activities with local volunteer firefighters.

**Keywords :** discussion-based exercises, disaster ethnography, power of imagination

### 1. はじめに

防災に関する研修方法の一つとして、災害エスノグラフィを活用した人材育成手法が提案され、内閣府により作成された「防災に関する標準テキスト」の中で紹介され、行政の防災担当者の研修として活用されている<sup>1)</sup>。

本手法は「災害危機管理に関する講義・訓練・演習の体系」<sup>2)</sup>上では討論型図上演習<sup>3)</sup>に整理されると考えられる。討論型図上演習の目的の一つとして、対応型図上演習<sup>4)</sup>に進めるための能力を養うことがあげられるが、一方、対応型図上演習では難しい、災害危機管理計画やマニュアルの作成・修正においてさまざまなケースを想定しつつ議論するようなものも含まれることが指摘され、前述のテキストの中でも記述されている。

しかし、災害エスノグラフィを活用した研修では、このような討論型図上演習としての目的やその効果は未だ十分に検証されているとは言い難く、適用事例を重ねることが必要であると考えられる。

本論文では、討論型図上演習として災害エスノグラフィの効果に期待するところを整理するとともに、消防職員の初任者研修において災害エスノグラフィを活用した事例を紹介する。本事例では、特にイメージ(想像)力の向上及び関係機関との連携の強化を目的としており、研修の成果やアンケート結果からその効果が確認された。

### 2. 災害エスノグラフィに期待する効果

#### (1) 災害エスノグラフィの特徴

林ら(1997)<sup>3)</sup>は、災害エスノグラフィとは、「災害対応プロセスのうち、知識として共有化し難い“暗黙知”を体系的に整理し、災害現場に居合わせなかった人々が災害という未知の文化を追体験し、暗黙知の共有化が可能となる形に翻訳したもの」と定義し、その特徴を以下のとおり整理している。

- ① 災害現場に居合わせた人々自身の言葉で教えてもらう

- ② 災害現場に居合わせた人々の視点から災害像を描く
- ③ 災害現場の人々の体験を体系化し、災害という異文化を明らかにする
- ④ 災害という異文化を、その場に居合わせなかった人々が共有できる形に翻訳する
- ⑤ 災害現場にある暗黙知(⇨形式知)を明らかにする
- ⑥ 傍観者の視点を捨てる、無意識のうちに持つ災害に関するステレオタイプを捨て、追体験する

これらの特徴から、テキストでは災害エスノグラフィを防災担当者の研修に活用するだけでなく、実体験の少ない防災行政における地域防災計画の修正やマニュアルづくりへも活用できると提案している。

この提案の背景には、災害エスノグラフィの効果として、災害の特殊性を理解し、状況を判断する能力が習得できるとされていることがあるが、その根底にあるのは、災害エスノグラフィのストーリー性にあると考えられる。

#### (2) 知識を行動に結びつける過程

知識を行動に結びつけていくためには、「まなぶ」「ならう」「ためす」の3つの過程を繰り返すことにより効果が発揮される(図1参照)。

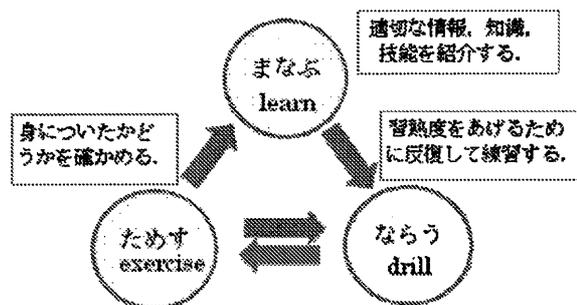


図1 研修・訓練の基本モデル<sup>4)</sup>

災害対応においては、実際の大災害を経験する機会は少なく、またケースバイケースで対応が異なることからこの3つの過程を繰り返すことが重要である。特に、「ならう」の過程においては何を反復するかが重要であり、災害エスノグラフィのストーリー性が重要なキーワードとなる。

(3) 災害時の行動と演習

災害時の行動を整理したものとして、田中により避難行動のプロセスが示されている<sup>5)</sup> (図2参照)。

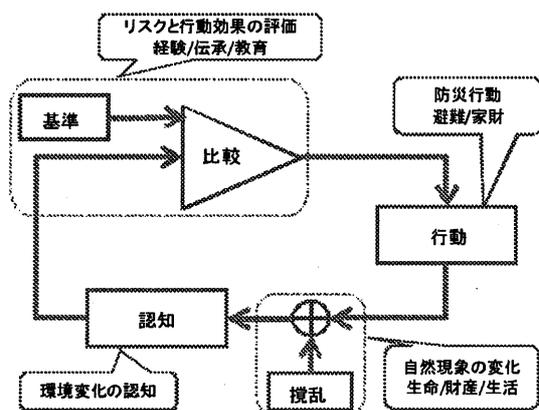


図2 避難行動のプロセス<sup>5)</sup>

このプロセスは自然現象の変化が社会に何らかのインパクトを与えるとき、人は「認知」と「比較」という二つの段階を経て行動に移すというものである。またこのプロセスは住民の避難行動を前提として検討されているが、単に避難行動だけに当てはめられるものではなく、広く災害時の行動全般に当てはまると考えられる。さらに、本来組織的な行動をする行政や消防組織などでは、さまざまなマニュアルや計画により事前に判断基準が決められていることから「認知」という段階は比較的容易にクリアされるはずであるが、大規模・広域災害において地域の孤立が多数発生するような場合には、情報が少なく、組織的な対応が十分には機能せず、おそらく同様の行動プロセスを踏むものと想定される。

さらに田中によると、このプロセスにおけるそれぞれの段階において問題点が指摘されている (図3参照)。

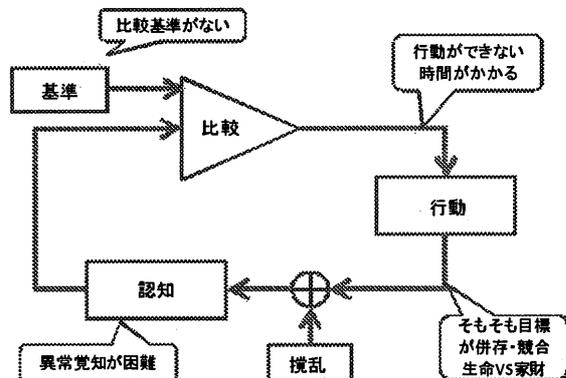


図3 行動プロセスの問題点<sup>5)</sup>

そもそも自然現象は連続的に変化するものであるから異常覚知が困難である。また、与えられる情報は単なる数値情報にすぎないために、判断するための比較基準が

事象や地域や状況によって全く異なっている。迷っていると行動できないか時間がかかってしまう。そして、仮に行動しようとしたとしても、生命が大事か家財が大事かといった相反するような選択を迫られる場合が考えられるというのである。

この行動プロセスにおいて問題とされる事項を解決していくために災害時に求められる能力として、まず判断力、行動力が考えられる。これらの能力については判断の前提となる基準や行動のマニュアルが明らかにされ、またそれが訓練等により反復されている場合に、より力を発揮すると考えられる。また、組織内で個々の目標とすると若下の相違があった場合には組織が一体として行動するための調整力が必要となる。さらに、そもそも今後の展開を想定することが判断や行動の正確さ・迅速さにつながると考えられるが、そのためには想像力が必要となる。これらの能力を向上するために身につけるべき基礎的な要素とそれらを習得する手段を簡潔に整理したものが表1である。

表1 行動プロセスの問題と解決する能力

課題	比較基準がない	行動ができない	目標が併存・競合	異常覚知が困難
求められる能力	判断力	行動力	調整力	想像力
要素	データ	パターン	コミュニケーション	ストーリー
手段	講義	訓練	場	演習

実際の災害時にはいろいろな能力を複雑に発揮して対応することになるが、この表では、災害時の行動プロセスから抽出される問題の一つとして異常覚知の困難性が指摘されている中で、その問題を解決するためには想像力の向上、ストーリー性をもった演習の実施が必要であることを示した。また、想像力が判断力、行動力、調整力と並んで災害時に必要な能力として認識し、その能力を身につけるためにストーリー性をもった演習の実施が必要であると考えられるものである。

以上のことから、消防職員への研修においても、災害対応のストーリー性を習得するための研修が必要であると考え、災害エスノグラフィの活用を試行することにしたものである。

3. 災害エスノグラフィを活用したこれまでの取り組み

これまでの研修において、災害エスノグラフィが活用された事例をその手法により整理すると、表2のとおりである。

表2 災害エスノグラフィの活用事例

	対象	人数	時間	使用した話	グループ討議	検討項目	成果	期待される効果
①	地方自治体防災担当者	56人	50分	遺体の処理	有り	地域防災計画(マニュアル)	チェックリスト	対応策の優先順位
②	S市役所土木職員	43人	80分	給水活動	有り	地域防災計画(マニュアル)	計画の修正	イメージ力の向上
③	電力会社の社員	42人	390分	災害対応	有り	災害対応マニュアル	簡易マニュアル	実効性の高いマニュアル
④	K町夜場隊長	12名	135分	災害対応(区役所) 水害の記録	有り	地域防災計画 初動マニュアル	地域防災計画の修正	一丸となって対応する能力
⑤	県地方振興局建設部	20人	30分	災害対応	有り	(O&Gとの併用)	初動マニュアルの整理抽出	意識の向上
⑥	地域住民	30人	90分	被災者のブログ	なし		読み聞かせ 課題抽出	意識向上
⑦	小学校	35人	15分	被災小学生の作文	なし		へえ、やはり、なるほど 課題抽出	意識の向上

ただし、①から④は「災害に関する標準テキスト」を元に作成し、⑤から⑦は筆者による事例を整理したものである。

現状では、災害エスノグラフィだけで研修を構成する機会が少ない。また、集団かつ講義中心の研修形態の中で、一人一人が個別に話を読む時間を設け、それを研修会場全体に浸透させることが難しい。そのため、①研修の対象となる人と②使用する災害エスノグラフィと③研修により求められる成果をマッチングすることが課題の一つであると考えている。

#### 4. 消防職員への適用事例

##### (1) 実施概要

当該研修は和歌山県消防学校が実施する消防職員の初任科研修の一環であり、経験は少ないが、4月に任用されてから度重なる研修・訓練を受けている。その中で、筆者らは県の水防担当課として水防に関する研修を受け持っている。したがって、災害エスノグラフィも水害に関するものを使用し、水防活動に関連した災害対応を習得するようなカリキュラムとした。

研修の実施概要は以下のとおりである。

- ① 実施日：平成20年8月19日（火）
- ② 実施場所：和歌山県消防学校教室
- ③ 参加者：18～27歳の48名
- ④ 班構成：1班5～6人×8班
- ⑤ 時間構成：
  - 9:20～10:10 講義「水防の基礎知識」
  - 10:20～11:10 演習1「災害エスノグラフィを読む」
  - 11:20～12:10 演習2「効果的な災害対応」

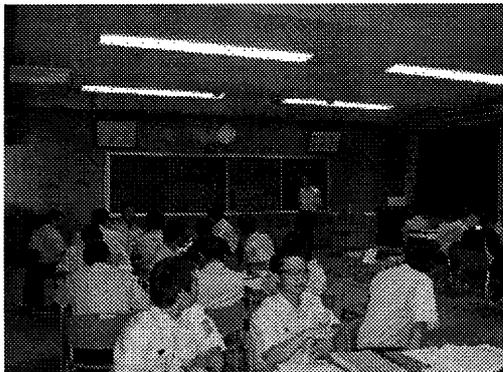


写真1 研修室での研修風景

##### (2) 災害エスノグラフィの活用

当該研修において、災害エスノグラフィを活用するにあたり、以下のとおり5つのフレームに分けて研修を進めた（図4参照）。

- ① 災害の対象地の地勢の概要を紹介する
 

災害エスノグラフィの対象とした場所を自らの活動の場としてとらえてもらうために、まず、対象地であるA市とB川の地勢の概要を紹介した。あらかじめ地勢の概要を知ること、その後の災害エスノグラフィをより具体的に読み込むことができるのと、自分の本来の活動の場（出身地）と比較して感じ取ることができると考えた。このフレームは1限目の講義の最後に災害エスノグラフィの紹介とともにいった。
- ② 消防職員として何を考えるか
 

次に、消防職員として、災害発生時にどのような行動をとるべきかを考える。当該研修では

平成16年台風23号による水害を例に、災害の状況の変化を情報として知り得た場合にどのように行動を起こすか、をアンケート形式で答えてもらった。これは現状の知識の中で、研修生らがマニュアル等をどの程度認識しているかを把握することになるが、一方で、研修生が災害エスノグラフィを読む前段として災害の程度を認識してもらい意味がある。このフレームは2限目の演習1の冒頭に行った（所要時間15分）。

##### ③ 災害エスノグラフィを読む

3つ目のフレームは災害エスノグラフィをしつかりと読むことで、演習1の主たる課題にあたる（所要時間20分）。

今回使用した災害エスノグラフィは富士常葉大学災害エスノグラフィ研究チームが作成したもの<sup>9)</sup>で、平成16年台風23号による水害時に消防団員であった3人の経験をもとに、インタビューの内容を要約し、次の見出しを付けて整理したものである。

- ① 地域の特徴
- ② 平成16年7月新潟・福井豪雨災害の教訓
- ③ 初動・警戒本部立ち上げ
- ④ 堤防決壊まで
- ⑤ 堤防決壊・団員の安全確保
- ⑥ 翌口からの対応・地元の消防団員だからこそ
- ⑦ 不十分な装備でのたたかい
- ⑧ 息子がいたらテレビ1台助かったのに
- ⑨ 水害の経験を次にいかす工夫

今回の演習では参加する人数が多いことと、演習時間の都合により、演習参加の第1班から第4班については「水害発生当日の状況」に関する内容として見出しの①から⑥を、第5班から第8班には「水害発生翌日の状況」に関する内容として見出しの①と⑥から⑨を、それぞれA4（36字×35行）5枚にまとめ教材とした。また、研修手法は地域安全学会人材育成システム構築のための特別委員会行政部会の成果を活用し、読みながら「初めて知った事実」「やはりそうだったかと感じたこと」「共有すべき知恵」と思うところにマークし、それらの箇所をもとにグループ討議をした（所要時間10分）。

##### ④ 災害対応のポイントを抽出し、発表する

③のフレームをさらに進め、グループ討議を行う（所要時間15分）。消防職員が地元消防団と連携し、効果的な災害対応をしていくためのポイントをグループごとに3つ抽出してもらい、それを各班持ち時間3分で発表してもらった（所要時間24分）。現場の第一線で活動する消防職員にとって消防団との連携はありそうでなかなかない。ともすれば上下関係にもなりがちであるが、消防団との連携の重要性を考えるよいきっかけになった。

また、人前で発表するというのも研修の一つであるといえる。

##### ⑤ 講評及び被害状況の概要を紹介する

発表内容の講評を行うとともに、被害状況を詳述することで、被害の状況が刻々と変化する途中の過程における「認知」の重要性を再認識してもらった（所要時間10分）。

当該研修では、教室での講義形式を主体とした研修スタイルであること、また、水防という消防職員にとってはあまりなじみない事柄を対象としていることから「学ぶ→ならう→ためす」のサイクルで言えば「学ぶ→ならう」のところ为重点が置かれた。

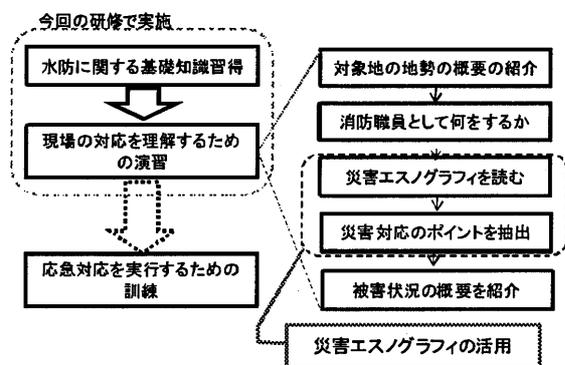


図4 災害エスノグラフィを活用した研修の進め方

(3) 「あなたならどうしますか？」

災害エスノグラフィを活用した研修に先立ち、研修参加者が客観的な事象の変化とともにどのように感じ、どのような行動をとろうとするか、をアンケートに回答してもらった形式で検証した。研修生には先に対象地の地勢の概要を説明し、理解を助けた。事象としては平成16年台風23号による水害時の気象情報や一般市民からの情報のうち、台風接近が想定されるころから、水害発生の日々に河川（B川）が警戒水位を越えるまでの期間で以下の10個の事象を選び、スライドで時系列に提示しながらアンケートに答えてもらった。

- ① 平成16年10月13日9時台風23号マリアナ諸島近海で発生
- ② 平成16年10月18日9時超大型で強い勢力となって沖縄の南海上を北上
- ③ 平成16年10月19日沖縄本島から奄美諸島沿いに進行
- ④ 平成16年10月20日正午ごろA市で雨足が強まり、時間20mm程度の降雨
- ⑤ 平成16年10月20日13時ごろ高知県土佐清水市付近に上陸
- ⑥ 平成16年10月20日13時山間部で時間20mmを越える降雨
- ⑦ 平成16年10月20日14時ごろ住民から電話「側溝から水があふれている」
- ⑧ 平成16年10月20日14時30分ごろ6時間後に警戒（氾濫注意）水位を超えると予測
- ⑨ 平成16年10月20日15時ごろ時間30mm程度の降雨がさらに継続する様子
- ⑩ 平成16年10月20日17時ごろ警戒（氾濫注意）水位を超える

また、回答は次の4つの選択肢から選んでもらった。

- A：〇〇へ出発
- B：〇〇へ連絡
- C：〇〇を実施
- D：その他

Aは現場への出動を、Bは他の組織との情報共有を、

Cは署内における準備の開始を意味するものであり、Dのその他はAからCに該当しない行動を想定した場合や特に行動を起こさない場合あるいは何も思いつかない場合などである。回答欄の主旨については事前に説明したが、回答に具体的名称を書かないことで、回答者それぞれの活動場所の違い等をふまえ、想像力を助長しようと考えた。回答の結果は表3のとおりである。

表3 各事象に対し研修者が想像した行動

事象	A	B	C	D
①	0	0	0	48
②	0	2	8	38
③	1	3	10	34
④	2	8	19	19
⑤	5	15	21	7
⑥	5	16	21	7
⑦	25	12	10	2
⑧	12	11	21	4
⑨	15	5	24	5
⑩	13	6	27	2

※この結果には一部重複した回答が含まれます。

雨足が強まった段階（事象④）で何かしなければいけないという意思が働き、台風が上陸した（事象⑤）ということでさらに危機感が高まっていることが伺える。住民からの被害の通報（事象⑦）によって現場へ出動するという意思が働くのはわかるが、一方で水位や雨量の情報に対しては何をすべきか明確でないようである。特に事象⑧、事象⑩において連絡に対する意識が低いことも課題の一つであるといえる。

(4) 消防団に伝えるべき3つのポイント

当該研修で使用したのは、消防団の人が水害発生時に水防活動をした経験を元に作成した災害エスノグラフィである。研修生それぞれが災害エスノグラフィを読みながら、「初めて知った事実」「やはりそうだったかと感じたこと」「共有すべき智恵」としてマークしたところを元に班内で討議し、研修の成果として、「消防団に伝えるべき3つのポイント」として、班内で取りまとめた。その結果は以下のとおりである。

〔第1班〕

- ・無茶するな
- ・過去の教訓を活かせ
- ・80%の家庭に防災行政無線

〔第2班〕

- ・独自の行動
- ・80%防災行政無線 ～防災意識が高い
- ・団員の安全確保

〔第3班〕

- ・電源の確保 ～ライフラインの確保ができなくて被災情報等が遅れて、結果的に被災者が増加する恐れがあるから
- ・市民情報
- ・二次災害

〔第4班〕

- ・ライフラインの重要性 ～正確な情報発信
- ・情報伝達の仕方 ～防災無線でのやりとり、パニックを起こさせない
- ・防災意識を高める重要性

〔第5班〕

- ・危機管理の低さ ～二次災害の予想、被害が出る前の対策
- ・消防団員の組織体制 ～交代制がとれない
- ・団員にも広報係が必要

〔第6班〕

- ・地域と密着が大事 ～その地域の地形とかが把握していれば災害時に役立つ
- ・事前準備 ～いざ災害が起きたときに速やかに対応できる（ウェットスーツなど）
- ・人命第一 ～家具とかよりも命があれば後々何でもできる

〔第7班〕

- ・自衛隊のサポート ～団員は地元の人なので、地形などの特徴をよく知っている。団員から自衛隊に活動的に伝えることで、より効率的に活動できる
- ・休憩をとる ～頑張りすぎたら体がもたないので、交代しながら働くか、適宜休憩をとる
- ・正義感にかられて危険なところに突っ込むのはやめる ～消防士や自衛隊などのプロに任せて、そのサポートに徹する

〔第8班〕

- ・地形、地理の把握
- ・日々の訓練による指揮や知識や技術の向上
- ・通信設備による情報の共有 ～アマチュア無線など、あるものを活用

各班で取りまとめた結果を概観すると、第1班から第4班は4班中3班が防災行政無線に言及するとともに、残る1班については被災情報の送れを懸念して電源の確保を指摘していることから「情報」を重視していることがわかる。一方、第5班から第8班は消防団の業務や組織体制、あるいは地形の把握といったことが指摘されており、「体制のあり方」に重点を置いていることがわかる。このことは、前者については初動対応における反省、後者については組織的体制が整ってからの対応に対する反省をそれぞれの確に抽出した結果であると考えられる。

(5) 討議結果から読みとれる効果

今回は災害エスノグラフィをグループ討議の形式で読みこなそうとした。そこで、討議結果から読みとれる効果について取りまとめた。災害エスノグラフィを活用するポイントは下記の3つである。

- ① 災害エスノグラフィが「学ぶ→ならう→ためす」のサイクルの一翼を担うことができるか
- ② 災害エスノグラフィを活用した演習がそれ自体で想像力を高める効果があるか
- ③ 直接の所属でない組織に関する災害エスノグラフィを読ませることにより効果が発現するか

一つ目については、自分たちの組織体制の改善に役立つポイントが抽出できているかということで評価される。今回の研修では「学ぶ→ならう」のところで研修を実施したためにサイクルとしての評価はできないが、「事前準備」「日々の訓練」「通信設備による情報の共有」など机上の計画や精神論的なものだけでなく具体的に訓練の必要性につながる点を抽出している。また、演習の冒頭のアンケートでは十分認識できていなかった情報共有の課題についても演習の成果として認識できていることは評価できる。

二つ目については、被災状況を想定し、活動に活かす

ことができているかということで評価される。消防団員に対して「人命第一」「休憩をとる」といった点を抽出しているのは災害対応時の消防団の活動の大変さを読みとった結果である。「防災意識を高める重要性」を指摘したことは災害エスノグラフィから総括的に災害像を描いた結果であると考えられる。

三つ目については、自組織と他組織との関係が把握できているかということで評価される。今回では消防職員に対して消防団の災害エスノグラフィを読んでもらうことでのような効果がでるかということであるが、「団員の安全確保」「地域と密着が大事」「自衛隊のサポート」といった点を抽出しているところに他組織との連携を考えるきっかけを作っており、消防職員として、今後、消防団との役割分担のあり方を考える良い機会となったものと考えられる。

5. アンケート結果

(1) 講義と演習の効果

研修の最後にアンケートを行った。講義と演習の効果に関するアンケートの質問項目と回答内容は表4、5のとおりである。

表4 講義に対するアンケート

(1) 講義内容は		
a)	理解できた	7
b)	まあまあ理解できた	37
c)	あまり理解できなかった	2
d)	理解できなかった	0
(2) 水防計画書に関するスライドの内容は		
a)	理解できた	6
b)	まあまあ理解できた	38
c)	あまり理解できなかった	2
d)	理解できなかった	0
(3) 災害エスノグラフィに関するスライドの内容は		
a)	理解できた	10
b)	まあまあ理解できた	28
c)	あまり理解できなかった	6
d)	理解できなかった	0

表5 演習に対するアンケート

(1) 災害時の状況について、イメージ(想像)はできましたか		
a)	できた	12
b)	まあまあできた	26
c)	あまりできなかった	8
d)	できなかった	1
(2) 災害時にすべき活動について、イメージ(想像)できましたか		
a)	できた	12
b)	まあまあできた	27
c)	あまりできなかった	8
d)	できなかった	0
(3) あなた自身の災害時の活動に役に立ちましたか		
a)	役に立った	22
b)	まあまあ役に立った	22
c)	あまり役に立たなかった	3
d)	役に立たなかった	0

講義や水防計画書の説明に対し「あまり理解できなかった」という人が2人(4.3%)であったのに比して、災害エスノグラフィでイメージできたかという質問に対し「あまりできなかった」と答えた人が8人(17.0%)と大幅に増加しているところは問題がある。これは、災害エスノグラフィの手法が従来型の研修に比べてなじみが薄く理解されていないためであると考えられる。

一方で、災害時の活動に役に立つかという質問に対しては、44人(93.6%)の人が「役に立った」、「まあまあ役に立った」と回答しており、本手法による効果が期待できる結果となった。

**(2) 見直すべきと感じたこと**

演習を終え、演習の冒頭で実施した「あなたならどうしますか?」という問い(第4章第3項参照)に対し、特に見直すべきと感じたことについて、自由に記入してもらった。その全記載事項は表6のとおりである。

災害エスノグラフィ研修の前の回答では「〇〇へ連絡する」という項目を選択した人は少なかったが、1~4班では「もっと防災無線を活用すべき」とか「連絡網の構築」など、5~8班でも「消防団と緊密に連絡」とか「情報の共有」などと改めて情報伝達の重要性を認識したようである。また、具体的な表現ではないが、「早い目に行動」ということを感じてくれたことは研修の効果があったと言える。

**表6 「あなたならどうしますか?」という問いに対し特に見直すべきと感じたこと**

(1~4班)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・パトロールをもっとし、あらゆる情報を共有すべき</li> <li>・災害に対する意識をもっと強めること</li> <li>・もっと防災無線を活用すべきだと感じた</li> <li>・もっと災害が発生した時のイメージを持つ事が大切だと感じた(客観視しない)</li> <li>・危険だと感じれば少しでも早くそれに対応する必要があると思います</li> <li>・早めに行動をとることが大切</li> <li>・よくわかりませんでした</li> <li>・災害対応の実施も大事であるが、やはり連絡網の構築も行っていかなければならないと感じました</li> <li>・口頃からの対策が必要</li> </ul>
(5~8班)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・分団の組織管理ができていない</li> <li>・体験する前後で考えが変わると思った</li> <li>・災害が起こると自分の家を放っておかなくてはいけないので、台風が来るかも知れないという状況で家のことをするよう、早め早めに行動しなければいけないと感じました</li> <li>・まだ、消防人として、現場で活動した事がないので、あまり実感できませんでしたけれど、今後色々な経験を通じて身につけていきたいと思いました</li> <li>・消防団と消防署は災害が起こった場合、起こる前にも緊密に連絡を取り合うことが大事だと思います</li> <li>・情報の共有</li> </ul>

**(3) 全般の感想**

最後に研修全般に関する感想として、「災害対応に対して、今回の研修で気づいたこと、今後受けた研修など」という問いに対して自由に意見を書いてもらったと

ころ、災害エスノグラフィにかかる意見を抽出した(表7参照)。

当該研修では、消防職員に対し、消防団の災害エスノグラフィを読んでもらうことで、「現場を意識して学習ができた」とか「消防団員の活動内容を知ることができた」とか「(消防団員に対し)消防吏員としてやってあげなければならないことがわかりました」など、現場とともに活動する相手の体制や動きを知ることができ、そのことが自らの動きにもプラスになるであろうことが感想の中に読みとれた。

**表7 研修全般の感想(災害エスノグラフィに関するものを抽出)**

(1~4班)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・客観視しない事の大切さを学んだ。もっと全国での災害のケースから良かった事を抽出し、生かせたら良いと思う</li> <li>・平日頃の事前準備、訓練など災害に対して対応する力が必要だと感じました</li> <li>・災害にはやはり事前の対策と情報の共有・統制が必要だと思う</li> <li>・災害時にはどのような行動をすれば、住民がより安全に避難できるかなど、現場を意識して学習できました</li> </ul>
(5~8班)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章がわかりづらかったが、災害の場面を想像することができた。</li> <li>・もう少し詳しい情報があればエスノグラフィの想像しやすいと思います</li> <li>・消防団員の活動内容を知ることができました</li> <li>・あまりこういう講義を受けたことがなかったのが良かったです。実際の災害現場に出たとき、うまく動けるかわかりませんが、活動の際に役に立つと思いました</li> <li>・消防団員がどのような行動をとっていて、消防吏員としてやってあげなければならないことがわかりました</li> </ul>

**6. 考察**

近年において大きな災害の中に身を置いた経験のない我々にとって、経験を有するものからその文化(人の営み)を体得していくためには、災害エスノグラフィを分析し、災害対応へ活かしていく手法を確立していかなければいけない。

災害エスノグラフィの活用方法の一つとして、災害対応マニュアル修正に活用する事例が提示されているが、十分とは言えない。

本研究では災害エスノグラフィを水防に関する座学研修の一部として利用した。短時間である上、消防職員を対象としているにもかかわらず、使用する災害エスノグラフィが消防団員のものであり、一見ミスマッチングとも思える中でその効果について検討を行った。その結果、研修の成果としても、また、受講生の感想の中でも効果のある手法として評価された。

このことから、災害エスノグラフィが災害時の行動プロセスにおける「認知」の能力を高めるために必要な想像力を向上することに効果があることが示されたもので

ある。しかし、「だれ（研修対象者の職種）が、何（どのような人のヒアリングに基づくエスノグラフィか）を読むことによって、どのような効果が発現するのか」については、今後さらに事例を重ね、研修対象とツールと成果のマッチングを検討していくとともに、研修効果の検証を実施していく必要がある。

## 補注

- (1) 討論型図上演習：実際の災害危機発生時に直面する時間的制約を設けず、コーディネーターの下で自由度の高い議論をする形式の演習。
- (2) 対応型図上演習：災害危機発生時における情報のハンドリング能力と処理能力を高めるために、実際に災害危機が発生した場合とほぼ同じ状況を付与し、それに対応する演習

## 参考文献

- 1) 内閣府（防災担当）「防災に関する標準テキスト」、2007
- 2) 吉井博明，田中淳編「災害危機管理論入門～防災危機管理担当者のための基礎講座」，pp.308，2008
- 3) 林春男，重川希志依：災害エスノグラフィーから災害エスノロジーへ，地域安全学会論文報告集，No. 7，pp376-379，1997
- 4) 林春男，牧紀男，田村圭子，井ノ口宗成著「組織の危機管理入門ーリスクにどう立ち向かえばいいのか」，pp.137，2008
- 5) 川中淳著「人は避難しないのか，避難できないのか」，辻本哲郎編「豪雨・洪水災害の減災に向けて～ソフト対策とハード整備の一体化」，pp.51-71，2006
- 6) 重川希志依ら：機動的・効率的な消防団活動に資する災害エスノグラフィーの構築と活用手法の研究，平成19年度消防科学技術研究推進制度研究助成報告書，pp13-21，2008

(原稿受付 2009.9.04)

(登載決定 2010.1.08)